

吉井勇歌碑

所在地 愛媛県今治市宮窪町宮窪 2668 宮窪支所前

荒神の瀬戸

の

潮鳴を

聴く

勇

ますらをの

雄ころもちて

★

能島なる

(★のところから右に横書きで次の文が書かれている)

昭和四十一年四月

宮窪町観光協会

碑陰

文字なし



吉井 勇歌碑

所在地 愛媛県越智郡伯方町有津(あづみ) 矢崎集会所裏

人磨か

むかし ゆきし海をゆき

うまし 伯方の

島山を見む

勇

碑陰

文字なし

この歌碑の歌は昭和十二年夏吉井勇先生が三ヶ月にわたって有津の宿に滞在中百数十首の島の歌をこされたそのうちの一首である
昭和四十年秋十月

伯方文化會
伯方観光協會

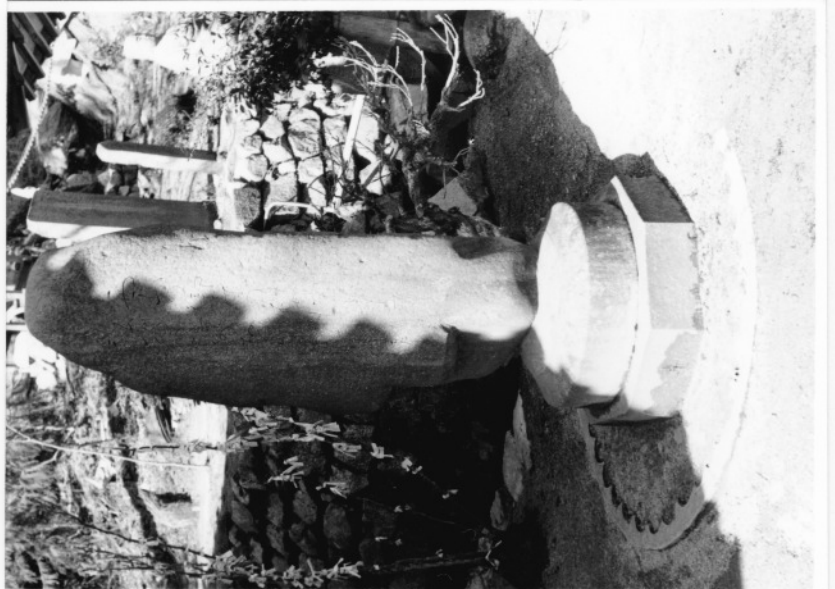
所在地 愛媛県周桑郡丹原町古田(ふるた)三至毛 西山興隆寺本堂前

西山の御寺の秋の深うして

弘安の鐘のおとのさやけさ 勇

碑陰

昭和四十一年霜月
八十九歳蒙 大澤自聚代



吉井勇歌碑

所在地 愛媛県今治市伯方町有津（あろうず）
矢崎集会所裏



人 麿 か

む か し い ゆ き し 海 を ゆ き

う ま し 伯 方 の

島 山 を 見 む

勇

碑陰

文字なし

この歌碑の歌は昭和十二年夏吉井勇先生が三ヶ月
にわたって有津の宿に滞在中百数十首の島の歌を
のこされたそのうちの一首である

昭和四十年秋十月

伯方文化會
伯方観光協會

所在地 愛媛県西条市丹原町古田甲 1657 西山興隆寺 本堂前

西 山 の 御 寺 の 秋 の 深 う し て

弘 安 の 鐘 の お と の さ や け さ 勇

碑陰

昭和四十一年霜月

八十九世院家 大澤自聚代



水軍ルート 名勝 船折瀬戸

吉



水軍ルート 名勝 船折瀬戸

前堂本 幸 劉興山西 7591 甲田古河現丹市余西原源愛 勝江内



日
升榮自

西
馬

教 本堂 ↓



三重塔 ←



銅鐘 (重文) ←

吉井 勇歌碑

所在地 徳島県三好郡池田町 諏訪公園内

春ふかき

落花の塵を

踏みながら

諏訪山みちを

のほり来しかな

勇

碑陰

文字なし



吉井勇歌碑

所在地 徳島県三好市池田町 諏訪公園内

春ふかき

落花の塵を

踏みながら

諏訪山みちを

のほり来しかな

勇

碑陰

文字なし



吉

吉

春



春

①



春よかき

落花の塵を

踏みまかり

諏訪山みちを

のほりましかき

つみか

吉井 勇歌碑

所在地 高知県高知市桂浜 坂本龍馬銅像近く

大土佐の
海を見むとて

うつらうつら

桂の濱に

われは
来にけり

碑陰

桂浜観光道路完成記念
昭和三年秋建之
高知県交通株式会社

所在地 高知県高知市上町芋田 伊野部酒造 中庭

友にまた生きてかあらむこゝちして

土佐路恋しくわれは来にけり 勇

碑文



は昭和六年はじめて土佐に遊びその後五年間
居を構えるに至ったのは今はじ伊野部恒吉氏
るところが大であったこゝに両氏の旧知等
部氏を追憶する先生の作を刻し両氏の友愛を
んとするものである 昭和四年六月建立



吉井勇歌碑

所在地 高知県高知市桂浜 坂本龍馬銅像近く

勇

大土佐の

海を見むとて

うつらうつら

桂の濱に

われは

来にけり

桂浜観光道路完成記念

昭和三十二年秋建之

高知県交通株式会社



碑陰

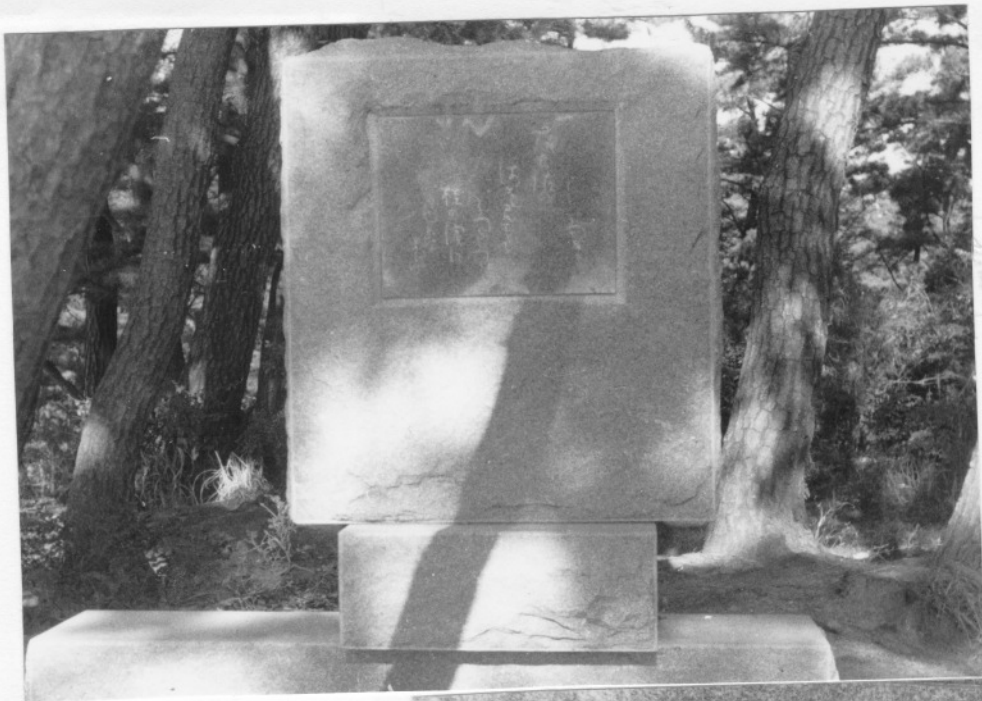
所在地 高知県高知市上町5丁目 伊野部酒造 中庭

友いまた生きてかあらむこゝちして

土佐路恋しくわれは来にけり 勇

碑陰

吉井勇先生は昭和六年はじめて土佐に遊びその後五年間にわたり住居を構えるに至ったのは今は亡き伊野部恒吉氏の友情によるところが大であった こゝに両氏の旧知等相謀り伊野部氏を追憶する先生の作を刻し両氏の友愛を永く記念せんとするものである 昭和卅四年六月建立



吉井 勇歌碑

所在地 高知県高知市筆山 筆山公園頂上

つるきたち
土佐に
きたりぬ
ふるさとを
はしめて
ここに
見たる
ここに

勇

碑陰

高知市観光協会
高知市文化団体協力会
昭和三年四月建之

所在地 高知県香美郡香北町猪野々 鉱泉宿前

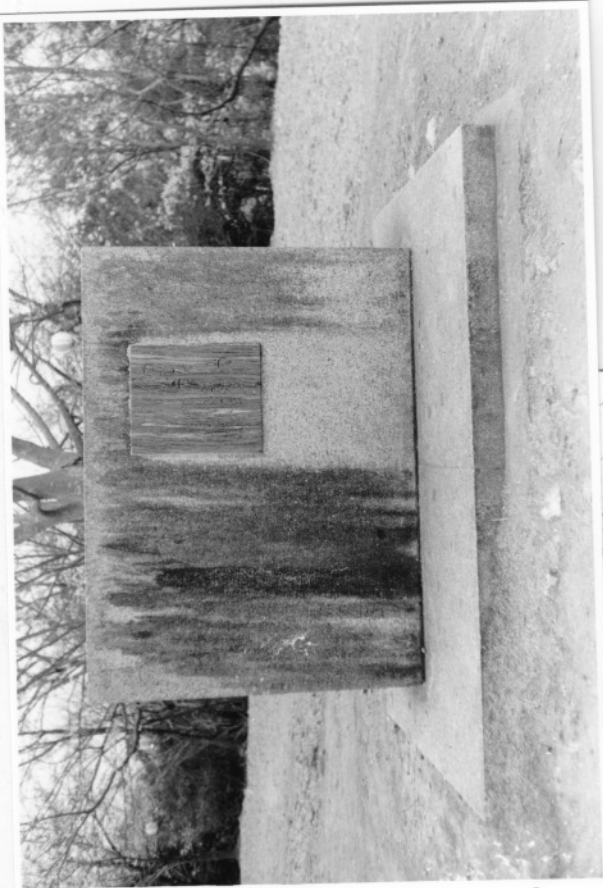
寂しければ御在所山の山櫻
咲く日もいと待たれぬるかな

勇

勇先生歌碑

吉井 昭和
年五所
月五村
日建之
在所観光協会

碑陰



吉井勇歌碑

所在地 高知県高知市 筆山公園 頂上

勇

つるきたち

土佐に

きたりぬ

ふるさとを

はしめて

ここに

見たる

ここに

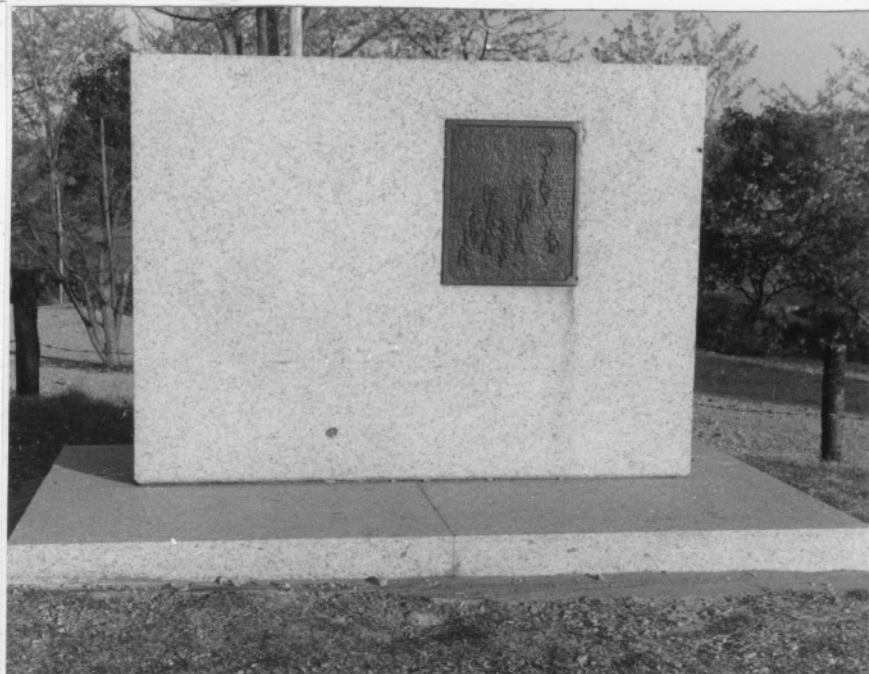
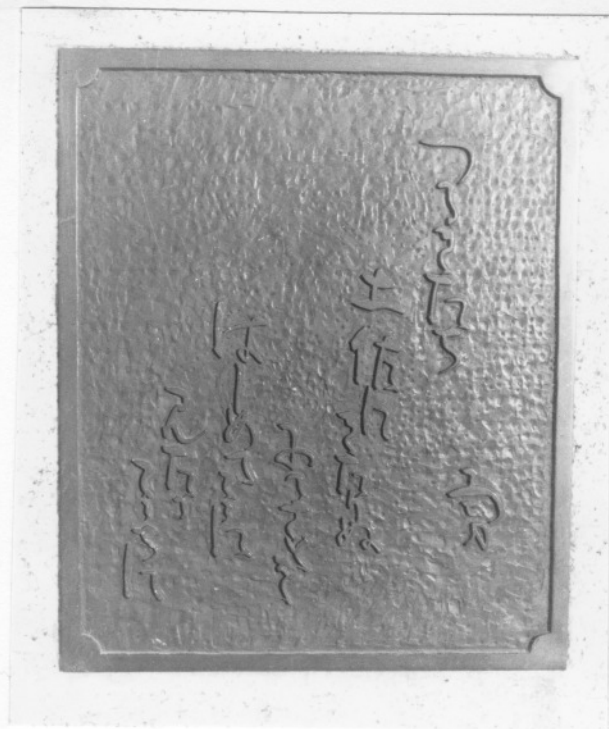
碑陰／高 知 市／高知市観光協会／高知県文化団体協力会／
昭和三十一年四月建之／

所在地 高知県香美市香北町猪野々 「鉾泉宿」前

寂しければ御在所山の山櫻

咲く日もいとゝ待たれぬるかな 勇

碑陰（横書き） 吉井勇先生歌碑
昭和三十二年五月吉日建之
在所村／在所観光協会



(注) もとは上の石の如く
青銅の陽刻の碑で
あつたが盗難に会い
現在は石で且つ陰刻
になつてゐる(右図)



吉井 勇歌碑

所在地 高知県香美郡土佐山田町逆川 竜河洞 出口すぐ

勇

碑陰

絶え間なく

昭和三年秋建之

石した、りて

宇田 耕一

福田 義郎

あるほと
に

土佐電線株式会社

竜河洞保存会

百千劫は

いつか
経にけむ



吉井勇歌碑

所在地 高知県香美市土佐山田町逆川 龍河洞 出口すぐ

勇

絶え間なく

石したゝりて

あるほと

に

百千劫は

いつか

経にけむ

碑陰

昭和三十三年秋建之

宇田耕一

福田義郎

土佐電気鉄道株式会社

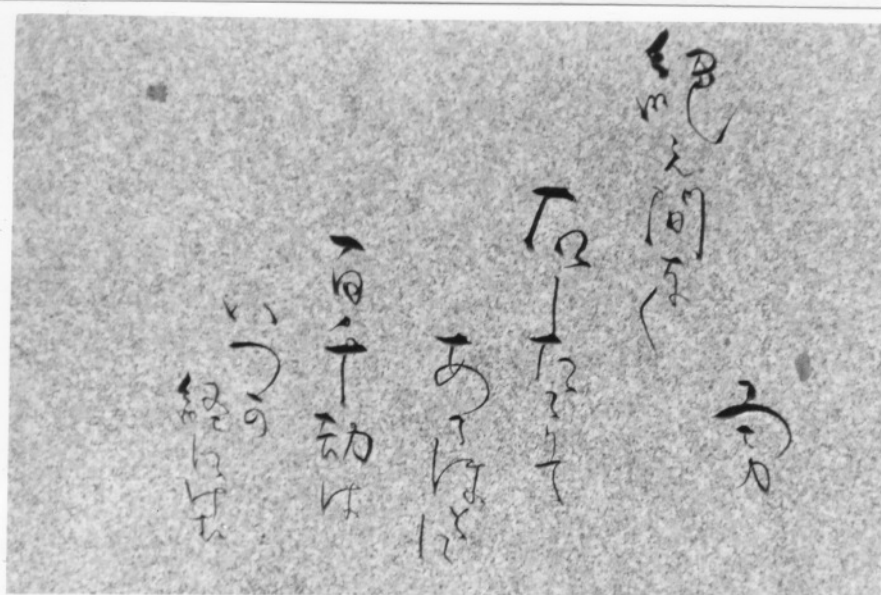
龍河洞保存会



吉田

昭和二十一年

三月一日



吉井 勇歌碑

所在地 福岡県福岡市博多区中洲三丁目一十六番地 川丈旅館前

勇

「五足の靴」文学碑

旅籠屋の

名を川丈と

いひしこと

なとおもひ出て

むかし

恋しむ

新詩社の与謝野鉄幹を初め北原白秋、
木下李太郎・吉井勇・平野万里の九州
路の旅は、紀行文「五足の靴」に綴ら
れている。その第一夜を博多のこの旅
館で過ごしたのは明治四十年七月三十
一日。わが文壇に南蛮文学の花が繚乱と
開いたのはそれからである。

右側面

吉井勇先生を偲ぶ会

左側面

昭和四十二年七月三日



吉井勇歌碑

所在地 福岡県福岡市博多区中洲 3-1-18 「川丈旅館」前

(上段)

勇

旅籠屋の

名を川丈と

いひしこと

なとおもひ出て

むかし

恋しむ

(下段)

「五足の靴」文学碑

新詩社の与謝野鉄幹を初め北原白秋・木下杢太郎・吉井勇・平野万里の九州路の旅は、紀行文「五足の靴」に綴られている。その第一夜を博多のこの旅館で過ごしたのは明治四十年七月三十一日、わが文壇に南蛮文学の花が繚乱と開いたのはそれからである。

右側面

吉井勇先生と偲ぶ会

左側面

昭和四十一年七月三十一日

吉共良郷

1-8 馬中司参判市岡源景岡藩 聖公遷

(遺土)



「五足の靴」文学碑

新詩社の与謝野鉄幹を初め北原白秋・
木下杢太郎・吉井勇・平野万里の九州
旅の旅は、紀行文「五足の靴」に綴ら
れている。その才一夜を博多のこの旅
館で過ごしたのは明治四十年七月三十
一日。わが文壇に南蛮文学の花が綻乱と
開いたのはそれからである。

旅籠屋の

名を川みよ

いん

ふん

ある

ふ

「五足の靴」文学碑

新詩社の与謝野鉄幹を初め北原白秋・
木下杢太郎・吉井勇・平野万里の九州
路の旅は、紀行文「五足の靴」に綴ら
れている。その才一夜を博多のこの旅
館で過ごしたのは明治四十年七月三十
一日。わが文壇に南蛮文学の花が綻乱と
開いたのはそれからである。

吉井 勇歌碑

所在地 福岡県福岡市城南区片江南町四四二十一 文学碑公園内

勇

かにかくに

祇園は

碑陰

文字なし

こひ

来る
とき
も

枕の
したを

水の
なか
る、



吉井勇歌碑

所在地 福岡県福岡市城南区片江南町 4-41-12 文学碑公園内

勇

かにかくに

祇園は

こひ

し

寐る

とき

も

枕の

したを

水の

なか

るゝ

碑陰

文字なし



吉共良

昭和四十四年 四月

吉共良

吉



吉井 勇歌碑

所在地 福岡県太宰府市幸府四十五「お石の茶屋」前

太宰府の 勇

碑陰

昭和四十二年秋

お石の茶屋に

九州文学同人建之

井泉水書

餅くべは

旅の愁ひも

いつか忘れむ



吉井勇歌碑

所在地 福岡県太宰府市宰府 4-15-1 「お石の茶屋」前

勇

太宰府の

お石の茶屋に

餅くへば

旅の愁ひも

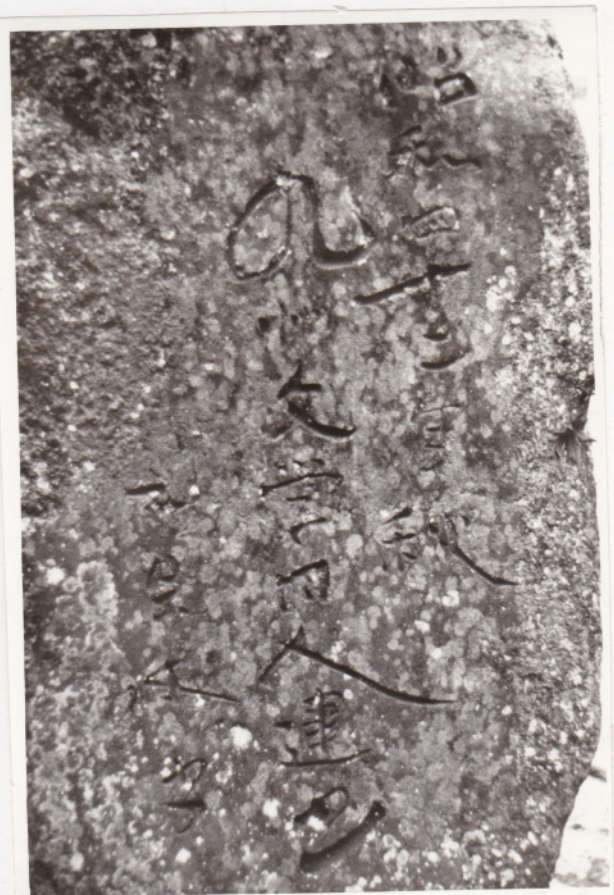
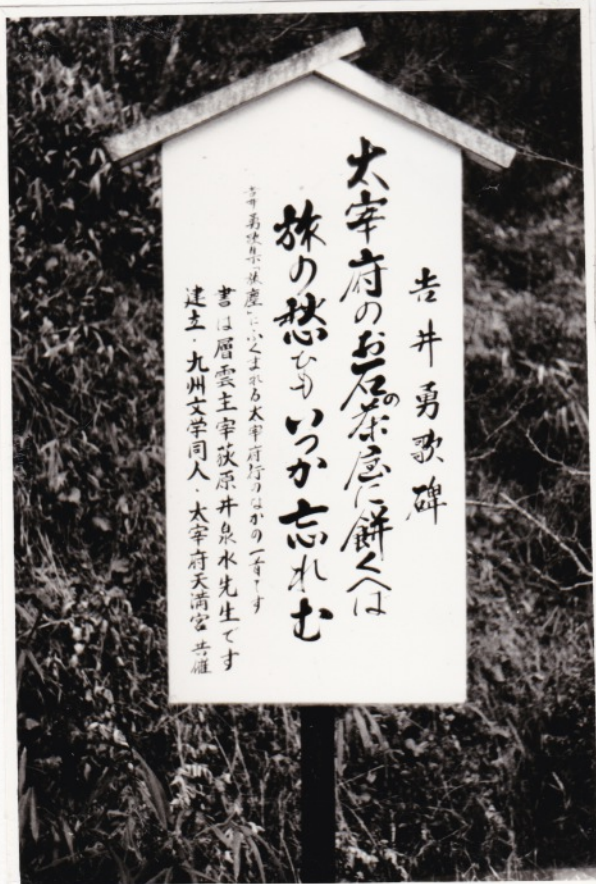
いつか忘れむ

碑陰

昭和四十二年秋

九州文学同人建之

井泉水書



吉井 勇歌碑

所在地 佐賀県東松浦郡呼子町 尾上公園内

勇

風なきに

呼子の

瀬戸の

うつ潮は

とろ

とろと

鳴りやます

けり

碑陰

呼子は古くより海外への要衝の地にして歴史的傳説頗る多し 予は明治四十年 與謝野寛 北原白秋 木下奎太郎等とともに此地に遊びしが更に又五十餘年を経て昭和三十四年こゝに再訪するの機縁を得たりそぞろに懷旧の情に堪へず歌心の動くまに数首を詠ぜしところこの町の有志の人々その中一首を石に刻せ長くこの地に残さむとす即ち感慨を述べて一文を草す

昭和三十五年仲秋

洛東歌隠

吉井 勇



吉井勇歌碑

所在地 佐賀県唐津市呼子町 尾上公園内

勇

風なきに

呼子の

瀬戸

の

うつ潮は

とゝろ

とゝろと

鳴りやます

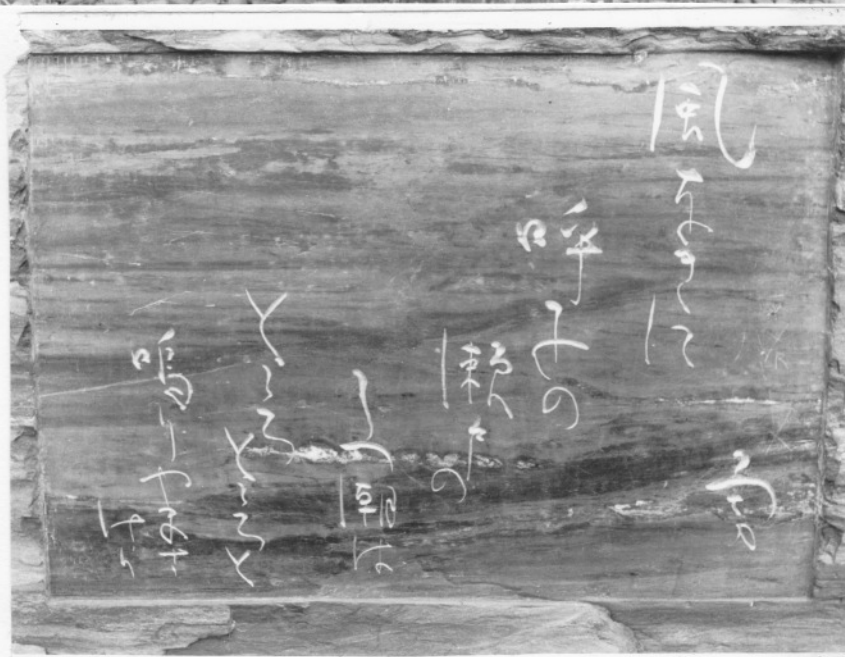
けり

碑陰

呼子は古くより海外への要衝の地にして歴史的傳説頗る多し 予は明治四十年 與謝野寛 北原白秋 木下杢太郎等とともにこの地に遊びしが更に又五十餘年を経て昭和三十四年こゝに再訪するの機縁を得／
たりそぞろに懷旧の情に堪へず歌／心の動くままに数首を詠ぜしところ／この町の有志の人々その中の一首を／石に刻んで長くこの地に残さむとす／即ち感慨を述べて一文を草す／ 昭和三十五年仲秋／

洛東歌隠／

吉井勇



吉井 勇歌碑

所在地 長崎県長崎市玉園町三七 聖福寺境内

じゃがたらお春の碑

新村出書

碑陰

長崎の

勇

鶯は鳴く

いまもなほ

じゃがたら

文の

お春

あはれと

世話人
林高島儀太郎
渡辺入郎吉
康輔

為

紫雲院畔森隆光信士追善

昭和七年首夏

父上野初太郎建之



吉井勇歌碑

所在地 長崎県長崎市玉園町 3-77 聖福寺境内

じゃがたらお春の碑

新村出書

碑陰

勇

長崎の

鶯は鳴く

いまもなほ

★

しゃかたら

文の

お春

あはれと

為

紫雲院 曄 森 隆 光 信 士 追 善

昭和二十七年首夏

父 上野初太郎建之

(★のところに次の世話人五名の氏名あり)

世話人

林 源 吉

高島儀太郎

島内 八郎

林田 浦治

渡辺 康輔



吉

河

川

★

石の寺



石碑の寺



聖福寺（長崎市）風景（三枚と七）

吉井 勇歌碑

所在地 長崎県長崎市 稲佐山 頂上近く

勇

おほらかに

碑陰

文字なし

稲佐の

嶺ゆ

副碑

吉井勇先生歌碑

昭和五十四年十月五日除幕

見はるかす

海もはろはろ

山もはろ

はろ



吉井勇歌碑

所在地 長崎県長崎市 稲佐山 頂上近く

勇

おほらかに

稲佐の

嶽ゆ

見はるかす

海もはろはろ

山もはろ

はろ

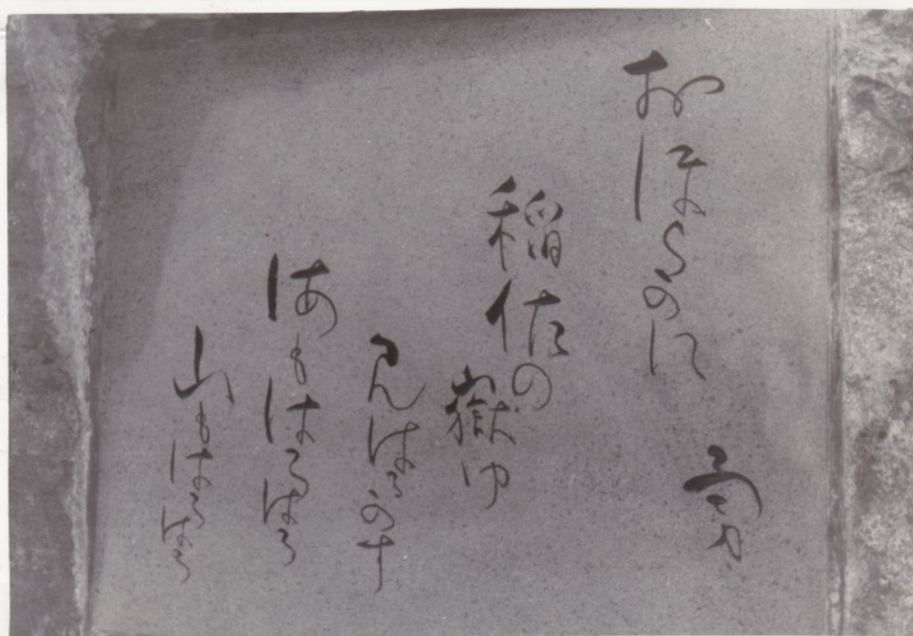
碑陰

文字なし

副碑

吉井勇先生歌碑

昭和三十四年十二月五日除幕



五足の靴記念碑

所在地 長崎県長崎市樺島町 西日本新聞社 向い側

五足の靴碑

明治四十年夏 與謝野鉄幹 木下杢太郎
吉井勇 北原白秋 平野萬里が この地上野屋
旅館に宿り帰郷後紀行文「五足の靴」を二六新
報に発表わが国南蛮趣味文学の先驅をなした

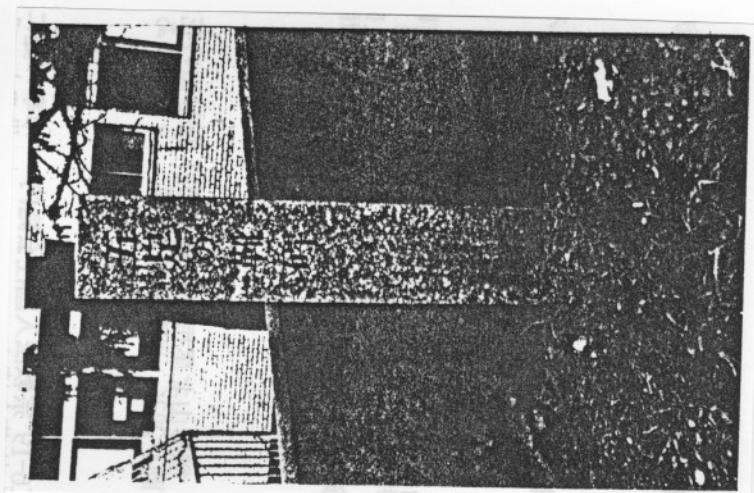
右側面

昭和四十五年四月一日設立

長崎市長 諸 谷 義 武

左側面

西日本新聞長崎市専売店会寄贈



五足の靴記念碑

所在地 長崎県長崎市樺島町 西日本新聞社 向い側

五足の靴碑

(縦書き この下にやはり縦書きで次の文章がある)

明治四十年夏 與謝野鉄幹 木下杢太郎
吉井勇 北原白秋 平野萬里が この地上野屋
旅館に宿り帰郷後紀行文「五足の靴」を二六新
報に発表わが国南蛮趣味文学の先驅をなした

右側面

昭和四十五年四月一日設立

長崎市長 諸 谷 義 武

左側面

西日本新聞長崎市専売店会寄贈

吉井 勇歌碑

所在地 長崎県長崎市松原町五〇 親和銀行 迎仙閣庭内

うつし世にやすらきあれと今日もまた
行仙嶽を見つゝ 祈りぬ 勇

左側面

昭和三年五月建之 井上米一郎

所在地 長崎県平戸市大野 川内峠上

山きよく海うるはしと
たぐつゝたひ人われや
平戸よく見む 勇

碑陰

昭和三年七月五日
平戸長 山鹿光世建之



吉井勇歌碑

所在地 長崎県長崎市松原町 2520 親和銀行 迎仙閣庭内

うつし世にやすらきあれと今日もまた
行仙嶽を見つゝ祈りぬ 勇

左側面

昭和三十一年五月建之 井上米一郎

所在地 長崎県平戸市大野 川内峠上

山 きよく 海 うるはしと
たゝへつゝたひ人われや
平戸よく見む 勇

碑陰

昭和三十二年七月五日

平戸市長 山鹿光世建之



吉井 勇歌碑

所在地 長崎県諫早市高城町 諫早公園内

螢

水きよき

勇

本明川の

碑陰

文字なし

螢にも

小きいのちの

ありていと

しも

塚

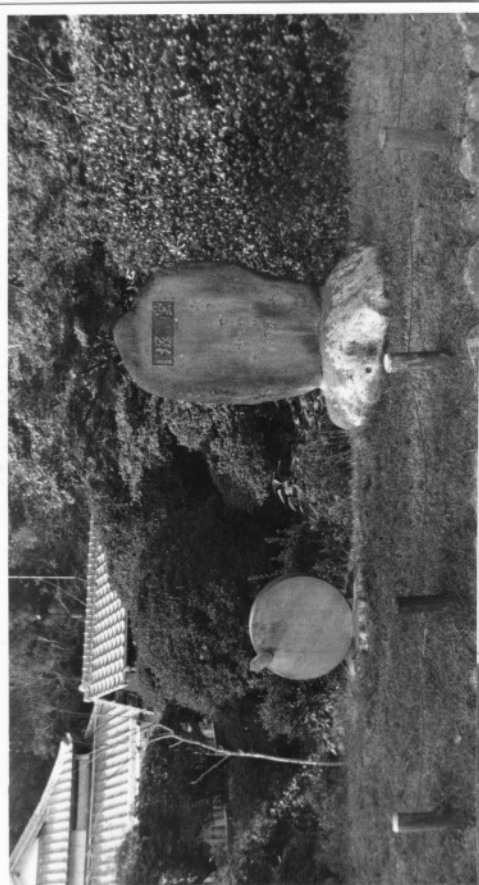
副碑

ほたるは私達の夏の仲間
平和な楽しい夢を描いてくれる
すべての人達の心の灯
精魂を灯しつけて
短かい命を果て、いく螢
そう、螢塚を築いて
祭ろう そうして
慰めよう

諫早市小学校生徒会

裏面

文字なし



吉井 勇 歌 碑

所在地 長崎県諫早市高城町 諫早公園内

塚 螢 (横書き)

(この下に次の歌が縦書きで書かれている)

碑陰

勇 文字なし

水 き よ き

本 明 川 の

螢 に も

小 さ き い の ち の

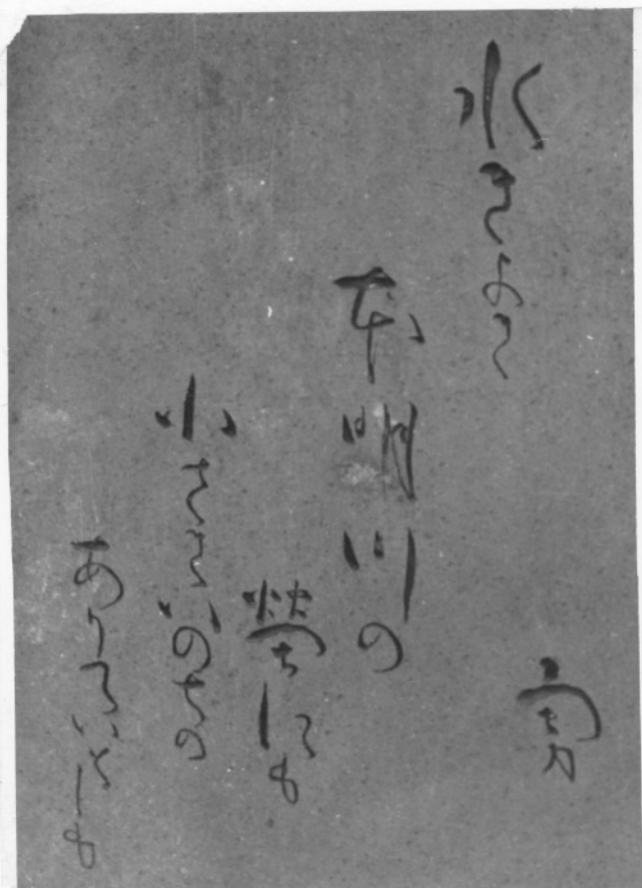
あ り て い と

し も

副碑

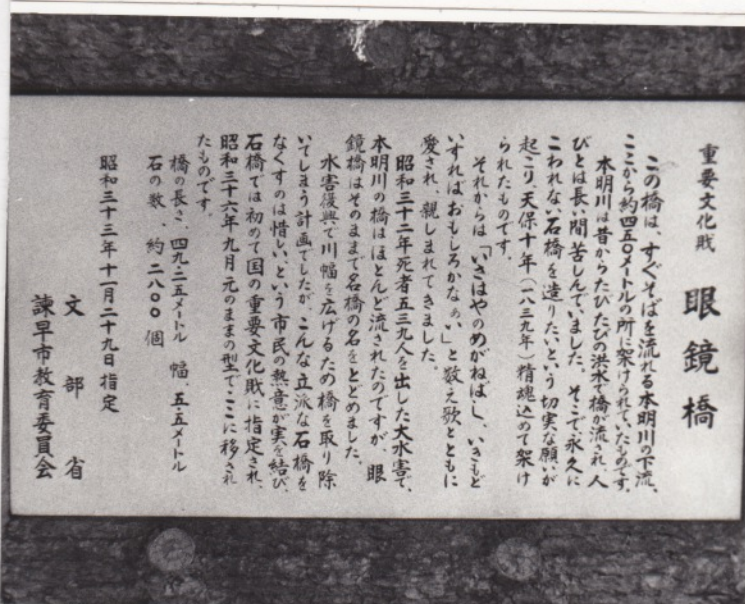
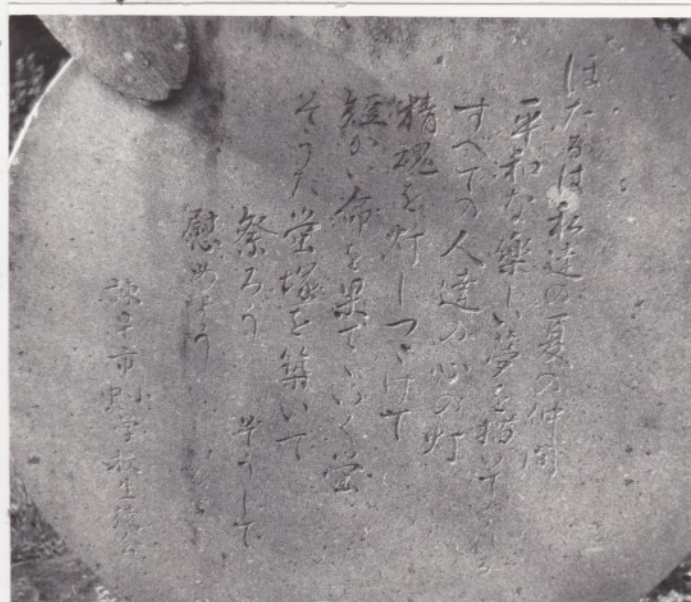
ほたるは私達の夏の仲間
平和な楽しい夢を描いてくれる
すべての人達の心の灯
精魂を灯しつづけて
短かい命を果てゝいく螢
そうだ螢塚を築いて
祭ろう そうして
慰めよう
諫早市小中学校生徒会

副碑裏面 文字なし





螢の像
↓



重要文化財 眼鏡橋

この橋は、すぐそばを流れる本明川の下流、ここから約四五メートルの所に架けられていた。本明川は昔からたひたひの洪水橋が流れ、人びとは長い間苦しんでいました。そこで、永久にこれな石橋を造りたいという切実な願が起り、天保十年（一八三九年）精進達で架けられたものです。

それからは、「さはやのめがねはし、いさよといすればおもしろかな」と歌え歌とともに愛され、親しまれてきました。

昭和三十三年死者五三九人を出した大水害で、本明川の橋はほとんど流されたのですが、眼鏡橋はそのままで名橋の名をとどめました。

水害復興で川幅を広げるための橋を取り除いてしまおう計画でしたが、こんな立派な石橋をなくすのは惜しいという市民の熱意が雲を結び、石橋では初めて国の重要文化財に指定され、昭和三十六年九月元のまゝの型でここに移されたものです。

橋の長さ、四九・五メートル 幅、五・五メートル 石の数、約二八〇個

昭和三十三年十月二十九日指定

文部省
諫早市教育委員会

吉井 勇歌碑

所在地 長崎県南高来郡小浜町雲仙三六 「湯元旅館」中庭

雲仙の

勇

碑陰

文字なし

湯守の

宿に

ひと夜

寐て

歌など

おもふ

旅つかれ

かも



吉井勇歌碑

所在地 長崎県雲仙市小浜町雲仙 316 「湯元旅館」中庭

勇

雲仙の

湯守の

宿に

ひと夜

寐て

歌など

おもふ

旅つかれ

かも



碑陰

文字なし

吉共良郷

國中（龍洞寺） 016



龍洞寺の境内



五足の靴記念碑

所在地 長崎県佐世保市下京町 四ヶ町アーケード入口

五足の靴文学碑

右側面

明治四十年八月五日、与謝野鉄幹、北原白秋、木下杢太郎、平野万里、吉井勇らが此の地京屋旅館に泊り、平戸、長崎、天草、島原等を巡遊後、紀行文「五足の靴」を発表し南蛮文学の先驅をなした。また鉄幹は佐世保夜店の詩を残す。

右側面

昭和五十二年八月 佐世保文化協会
佐世保短歌連盟
佐世保 白秋会
旧京屋土岐治雄

碑陰

葉山書



五足の靴文学碑

所在地 長崎県佐世保市下京町 四ヶ町アーケード入口

五足の靴文学碑

右側面

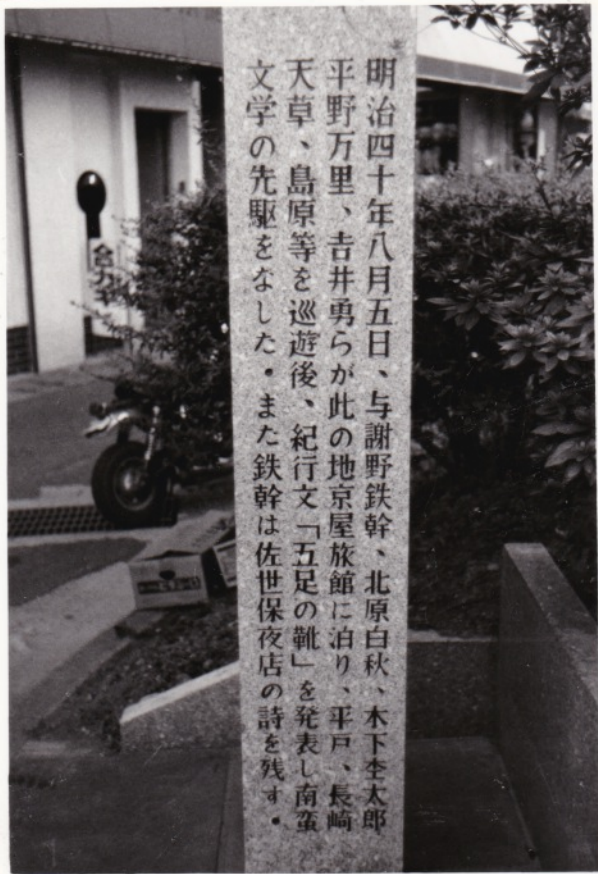
明治四十年八月五日、与謝野鉄幹、北原白秋、木下杢太郎
平野万里、吉井勇らが此の地京屋旅館に泊り、平戸、長崎
天草、島原等を巡遊後、紀行文「五足の靴」を発表し南蛮
文学の先駆をなした。また鉄幹は佐世保夜店の詩を残す。

左側面

昭和五十三年八月 佐世保文化協会
佐世保短歌連盟
佐世保白秋会
旧京屋土岐治雄

碑陰

葉山書



金不摩 →



五足の靴文学碑

結成20周年記念

1983年3月建立

五足の靴文学碑

所在地 長崎県佐世保市下京町 夜店通り

五足の靴文学碑 (横書き)

(この下に次の文 及び詩が縦書きで書かれている)

明治四十年夏、与謝野寛、平野万里、吉井勇、木下杢太郎、北原白秋の五人の歌詩人が九州旅行の途中、佐世保を訪れた。その旅行記が「五足の靴」である。五人は佐世保で一泊し、この地に夜店がたち並ぶ様子をみて、与謝野寛（鉄幹）が即興詩を口吟した。

ランプの明り、カンテラの
灯かげ煙れるせりうりの
夜店の中に、一段と
聲はりあぐる瀬戸物屋。

「早来い、早来い、品物は
みんな廉か。」といそがしく
左のふときてのひらを
握りこぶしに打叩く。

「この花いけは有田焼、
買はっせ、買はっせ、そら貳圓
廉か。」と呼べど、群集は
冷然として繞り見る。

「貳圓、壹圓五十錢、
七十五錢、四十錢、
ああ、負けましょ、二十錢。」
赤き裸を汗ばしる。

わが賣る品のあたひをば
恥づる色なく、おのれから
下げて手を打つ、あはれなる
佐世保の街の瀬戸物屋。

更にあはれむ。汝が妻は
死にか別れし、みそかをと
はたや逃げたる。三十の
男ざかりのやもめずみ。

後を見れば、竹たてて
夜露に吊すハンモック
眠りてありぬ、青白き
五才ばかりの娘の児。

明治四十年八月五日
与謝野鉄幹

碑陰 (横書き)

佐世保ライオンズクラブ
結成20周年記念
1983年3月建立

吉井 勇歌碑

所在地 熊本県阿蘇郡阿蘇町 大観峰 波多辺高原

大阿蘇の山の煙はおもしろ

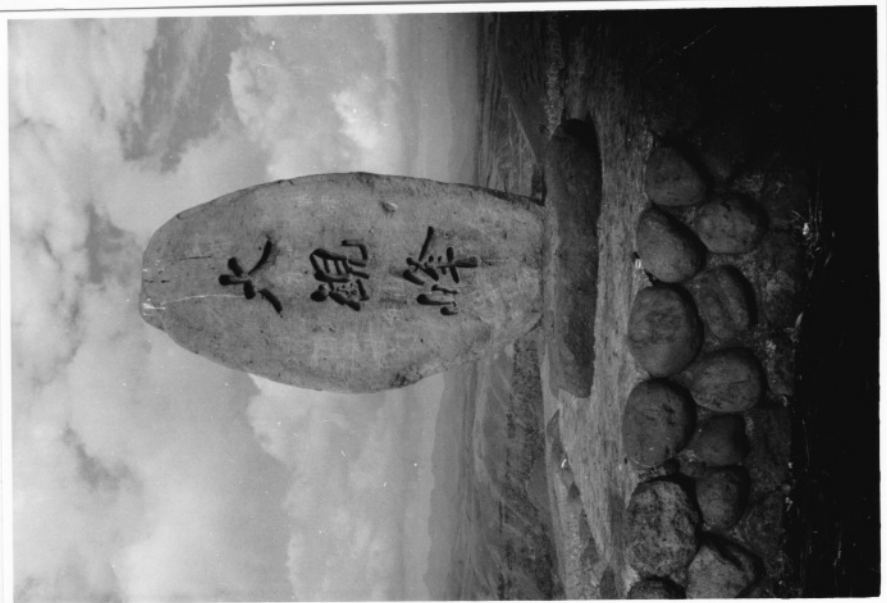
空にのぼりて夏雲となる

勇

碑陰

河崎 義夫
野上 進
伊豆 富人

月五日建立
石 幸 夫



吉井勇歌碑

所在地 熊本県阿蘇市阿蘇町 大観峰 波多辺高原

大阿蘇の山の煙はおもしろ
し

空にのほりて夏雲となる

勇

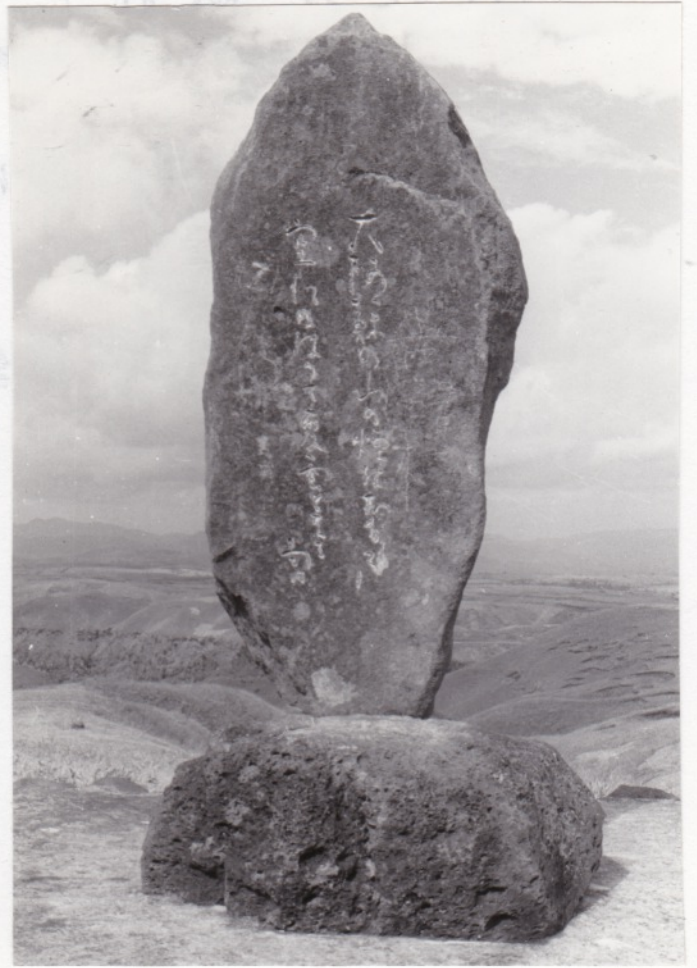
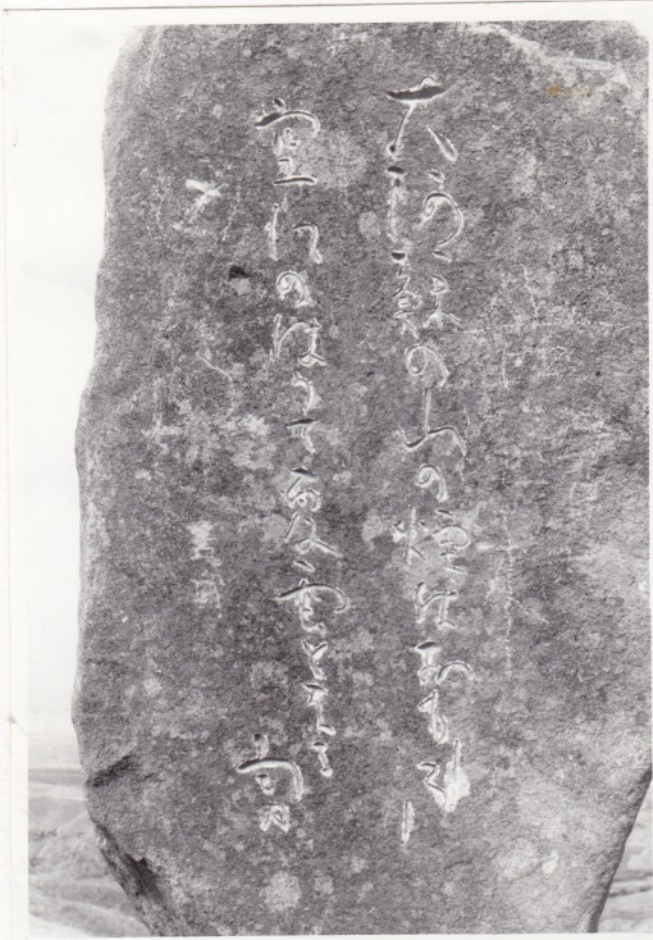
碑陰

河崎義夫
野上 進
伊豆富人

昭和三十三年五月五日建立

立石 幸夫

吉井原 燗



吉井 勇歌碑

所在地 熊本県天草郡天草町大江三三 大江天守堂前

白秋とともに泊りし天草の

大江の宿は伴天連の宿

碑陰

昭和三十七年三月

天草曾遊之詩録一首 勇 老 癡

前面の木の副碑

吉井勇歌碑について
明治四十年八月十一日新詩社
北原白秋、吉井勇、木下李太郎の
平野万里は主幹の與謝野寛と大江
を訪れた。寛は三十六才他はま
だ大学生であり若い青年詩人であつ
た。當時の司祭であつたガニエル
神父は仏人で五十年間大江に
いて神のまを一生を送つてこの地
に死した人であり一行を心から迎
えいろいろ語り合つたこの天草
の旅は若い詩人達の魂をゆさぶ
り激しい文学開眼がなされ哀切
に華麗詩情豊かな詩歌や戯曲と
なつて現われ白秋の邪宗門と
李太郎の「南蛮寺門前」吉井勇の
「酒はがひ」をその他多くの作品
に天草の旅が多く影響を与えている
そして我が国近代文学に耽美主義
の新風を吹き込み大なる文学活動
となつて開花していつた。この歴史的な新詩社同人の天
草の旅を記念するためこの天
歌碑を建てたのである。歌碑の歌
が當時の旅を回想し
作品である
十七年五月二十七日



吉井勇歌碑

所在地 熊本県天草市天草町大江 1782 大江天主堂 前

白秋とともに泊りし天草の
大江の宿は伴天連の宿

天草曾遊の譚録一首 勇老癡

碑陰

昭和二十七年二月

前面の木の副碑

吉井勇歌碑について

明治四十年八月十一日新詩社の

北原白秋 吉井勇 木下杢太郎

平野万里は主幹の與謝野寛と大江／

を訪れた。寛は三十六才他はま／だ大学生であり若い青年詩人であつ／た。当時の司祭であつたガニエル／神父は仏人で五十年間この大江に／いて神のような一生を送つてこの地／に歿した人であるが一行を心から迎／えいろいろ語り合つた

この天草／の旅は若い詩人たちの魂をゆさぶ／り激しい文学開眼がなされ哀切／に華麗詩情豊かな詩歌や戯曲と／なつて現われた。白秋の「邪宗門」／杢太郎のむ「南蛮寺門前」吉井勇の／「酒ほがひ」などその他多くの作品／に天草の旅が多く影響を与えている。／そして我が国近代文学に耽美主義／の新風を吹き込み大きな文学活動／となつて開花していった。／

この歴史的な新詩社同人の天／草の旅を記念するためこの／歌碑を建てたのである 歌碑の歌／は 吉井勇が 当時の旅を回想し／てつくつた作品である／

昭和二十七年五月二十七日

ファイル 73

吉 植 庄 亮

吉 江 弧 雁

吉岡 禅寺洞

吉 川 英 治

吉 田 一 穂

吉田絃二郎・明枝

吉 田 冬 葉

吉 野 秀 雄

古植庄亮・伊藤左千夫・古泉千樫歌碑

所在地 千葉県千葉市市場二 県立文化会館敷地内

砂原と空と寄合ふ

九十九里の磯行く人ら

蟻のことも伊藤左千夫

ここにそわが立ち見れば

安房上総山つららかに

起き伏しにけり 古泉千樫

よる波のそのまゝ凍り

はてにけり渚はながし

印旛大沼

古植庄亮

左千夫の碑右側面

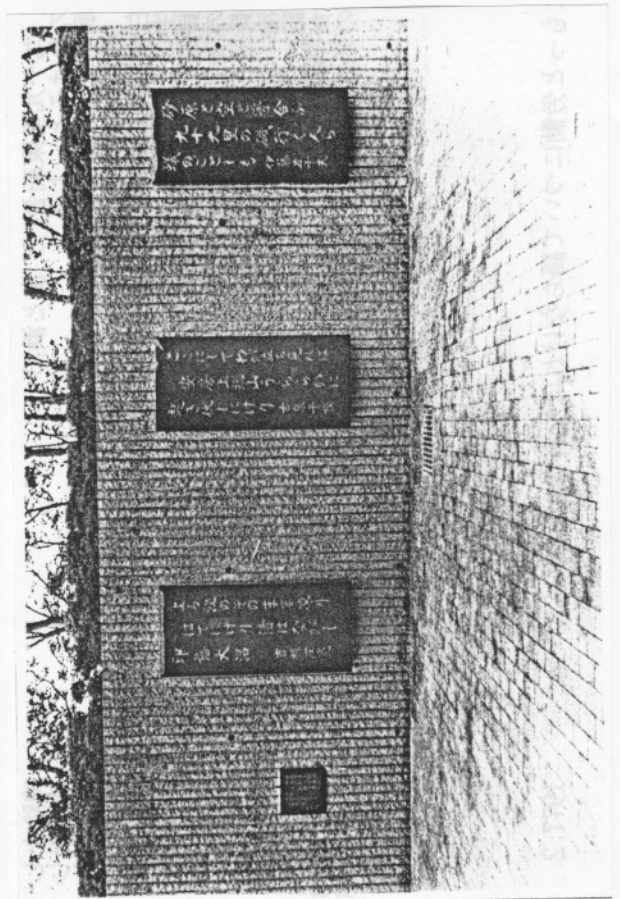
浅見喜舟書

県政百年を記念し
郷土の歌人を選び
ここに歌碑を建立
する

昭和四十六年

千葉県知事

友納武人



吉植庄亮・伊藤左千夫・古泉千櫨歌碑

所在地 千葉県千葉市中央区市場 11 県立文化会館敷地内

砂 原 と 空 と 寄 合 ふ

九 十 九 里 の 磯 行 く 人 ら

左千夫の碑側面

蟻 の ご と し も 伊 藤 左 千 夫

浅見喜舟書

こ こ に し て わ が 立 ち 見 れ ば

安 房 上 総 山 う ら ら か に

起 き 伏 し に け り 古 泉 千 櫨

よ る 波 の そ の ま ま 凍 り

は て に け り 渚 は な が し

印 旛 大 沼

吉 植 庄 亮

県政百年を記念し
郷土の歌人を選び
ここに歌碑を建立
する

昭和四十八年十月

千葉県知事

友納武人

吉植庄亮歌碑

所在地 千葉県印旛郡本林村下井戸 吉植庄亮自宅 前庭

あしひきの山の

碑陰

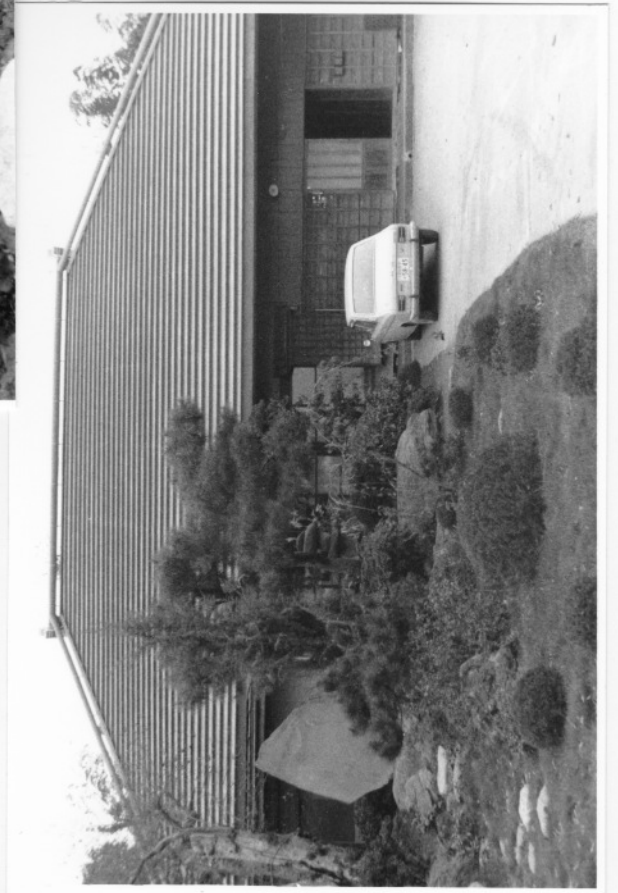
きはらのゆふつく日

昭和二十七年七月二十七日建之

檜魔社門下一同

光となりてちる

木の葉あり 庄亮



吉植庄亮歌碑

所在地 千葉県印旛郡本埜村下井 34 吉植庄亮旧宅 前庭

あしひきの山の

きはらのゆふつく日

光となりてちる

木の葉あり 庄亮

碑陰

昭和二十七年七月二十七日建之

橄欖社門下一同



吉 雄

昭和

NOV • 73A

光

多摩川沿いに建つ十二戸の町

町名は「十二戸」



光り輝く
ひまわり

はな
ゆき

光り輝く
ひまわり

はな
ゆき

吉植庄亮歌碑

所在地 千葉県成田市宗吾二五八 宗吾霊堂裏 公園内

紅水鶏また

しつけくもなきいて、

見わたすかきり

青田ゆふ風 庄亮

略歴

吉植庄亮 明治十七年四月三日 千葉県印旛郡本埜村下井に生まれる 東大経
済学科卒 昭和三年十二月七日歿す 享年七四歳 法名 なし 墓は千葉県印旛
郡本埜村下井 旧宅近くの先塋墓地にある

碑陰

昭和三年五月六日建之

橄欖杜門下一同



吉植庄亮歌碑

所在地 千葉県成田市宗吾 1-558 宗吾霊堂裏 公園内

紅水鶏また

しつけくもなきいてゝ

見わたすかきり

青田ゆふ風

庄亮

碑陰

昭和二十七年五月十八日建之

橄欖社門下一同

略歴

吉植庄亮 明治 17 年 4 月 3 日 千葉県印旛郡本埜村下井に生れる 東大
経済学科卒業 昭和 33 年 12 月 7 日歿す 享年 74 歳 法名 なし 墓は
千葉県印旛郡本埜村下井 旧宅近くの先塋墓地にある

内閣公 夷左衛門



石碑

吉植左衛門の墓

昭和二十四年十月

吉植左衛門の墓



吉植
翁頌
德碑

★

吉植左衛門の墓跡についで
色々と書いてある

昭和二十四年十月 印橋沼沿岸民

吉植亮歌碑

所在地 千葉県成田市宗吾1 宗吾一代記念館前

韻きつゝ

秋は至る

と

夕沼を見越し

に

蒼く

わか

里はあり

亮

碑陰

昭和五十年十一月十六日建立

歌集「詩祭」出版記念歌碑建立

賛同者一同

宗吾一代記念館↓





吉



刻
石
記



吉江孤雁詩碑

所在地 長野県松本市蟻ヶ崎 城山公園内

双の觸手は

大穴工を採って

全身で己が行跡を

書きとむる蝸牛

吉江孤雁

略歴

吉江孤雁 本名 喬松 明治十三年九月五日 長野県東筑摩郡塩尻村長畝に生まれる 早大英文科卒 昭和十五年三月二十六日歿す 享年五十九歳 法名 凌雲院帶星孤雁大居士 墓は東京都世田谷区豪徳寺二二四七七 豪徳寺墓地と 長野県塩尻市長畝 吉江家墓地とにある

碑陰

昭和十五年十月

孤雁会建之



吉江弧雁詩碑

所在地 長野県松本市蟻ヶ崎 城山公園内

双の觸手は
大空を探って
全身で己が行跡を

書きとむる蝸牛

吉江弧雁

碑陰

昭和二十五年十月

弧雁会建之

略歴

吉江弧雁 本名 喬松 明治 13 年 9 月 5 日 長野県東筑摩郡塩尻市長畝
に生まれる 早大英文科卒 昭和 15 年 3 月 26 日歿す 享年 59 歳 法名
凌雲院帶星弧雁大居士 墓は東京都世田谷区豪徳寺 2-24-7 豪徳寺墓地
と 長野県塩尻市長畝 吉江家墓地にある





吉

碑

全



吉江孤雁詩碑

孤の軀は、大空を翺々、全身で己の行跡を、書きとむる孤雁。
孤雁の本名は龜松、フランス文学者、明治三十二年松本市に生まれ、昭和十五年六十一才で没した。松本市で松本市立高等学校を卒業、早大に教授となり、大正五五年フランスに留学、帰国後早大にフランス文学科を創設した。孤雁は初め自然美意識による俳句、小説、感興の歌々を公にして文壇に現れた。
孤雁の著書は自らのペン書きを拡大したものである。この詩句は、亀松詩集に収められている、孤雁の歌の流しと題する詩集のものである。文学科が創設に際して、自らの生涯を回顧しているものと云い得よう。
建碑は昭和二十五年、孤雁会の発起である。松本市の町政には記念講演会が行われ、西条八十、田村泰次郎等が講演した。
昭和五十六年三月
松本市をよくする市民運動推進会議

吉江孤雁詩碑

所在地 長野県塩尻市大小屋六 塩尻中学校校庭

名をとくど

碑陰

知る人もなく

昭和四十六年度卒業生一同

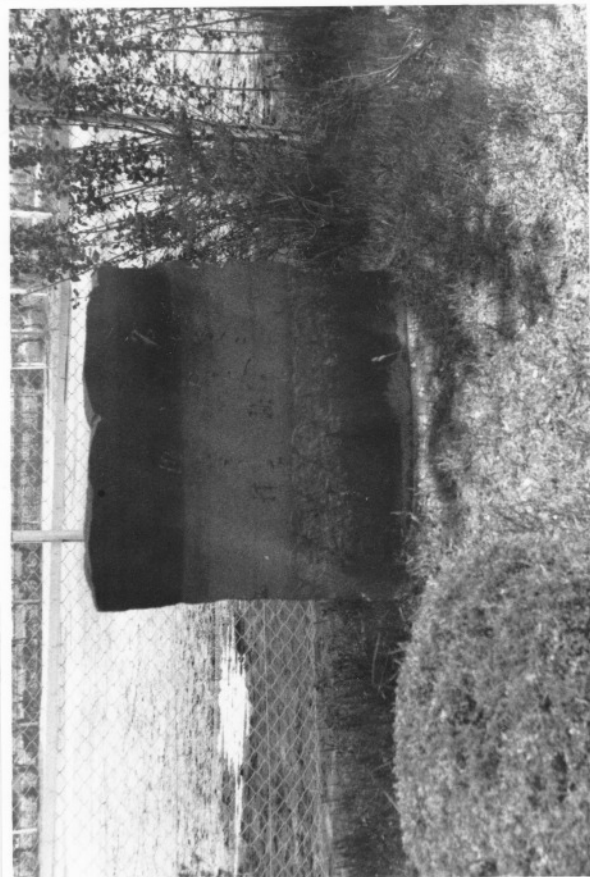
秋空に

燦爛として

輝きし

峯

孤雁



吉江弧雁詩碑

所在地 長野県塩尻市大小屋 61 塩尻中学校 校庭

名をとへど

知る人もなく

秋空に

燦爛として

輝きし

峯

弧雁

碑陰

昭和四十六年度卒業生一同



(塩尻市大山屋にある)



中々堀内家住宅



説明文



堀内家住宅

堀内家は江戸時代、旧堀内村の名主、勤王の豪農
 建築の年代は、十九世紀初頭、下西条の川上家
 建築通商からこの家も移築したと言はれる。
 建築手法は十八世紀後半頃(西暦)の建築とみれる。
 建物は、正面、桁行、梁間とも約十間で、屋根は切妻造、板葺
 葺き、正面、見える現状における間取りは、大略、表、中、裏
 三列に正切り、表の列は、上、中、下三間の座敷(かみ
 りん)と土間、中列は三間に四間のおもて土間、裏
 列は、おもて土間、他数室からなる。敷地におおむね改造の結果
 当初の姿が不明なところもあり、おおよそは縦横、か
 ら、柱組、あちや、軸部、と残っている。
 表側の座敷と正面の外観は明治時代の改造による構
 造は、梁、檼、柱、組、一般的に手法としており、桁行の
 梁、檼、柱、組、の上に、来る。
 堀内家住宅は、いづれ、本模造のなかで、大形、土質の空で
 あり、改造の結果は、正面の外観意匠は力強く、
 木質、民衆の、一、頂、英、と、示、す、も、と、て、価値、が、高い。
 昭和五十年三月
 塩尻市教育委員会

吉岡禅寺洞句碑

所在地 山口県下関市長府川端二二三 功山寺境内

功山寺にて

新樹の冷えに

いますが如く

障子しまる

禅寺洞

碑陰

文字なし



吉岡 禪 寺 洞 句 碑

所在地 山口県下関市長府川端 1-2-3 功山寺境内

功 山 寺 に て
新 樹 の 冷 え に
い ま す が 如 く
障 子 し ま る

禪 寺 洞

碑陰

文字なし

略歴

吉岡禪寺洞 本名 善次郎 明治 22 年 7 月 2 日 福岡県粕屋郡箱崎町
北海門戸に生まれる 昭和 36 年 3 月 17 日歿す 享年 71 歳 法名
大空院銀漢亭禪寺洞居士



吉

雨

森



重文
← 功山寺本堂

吉岡禪寺洞句碑

所在地 福岡県遠賀郡遠賀町虫生津(むしう) 高田神社境内

野の果に

貝塚はあり

虫生津 春日

禪寺洞

碑陰

一九六八・四

所在地 鹿児島県出水市荒崎 鶴の展望所

士古く渡来の鶴を歩かしむ

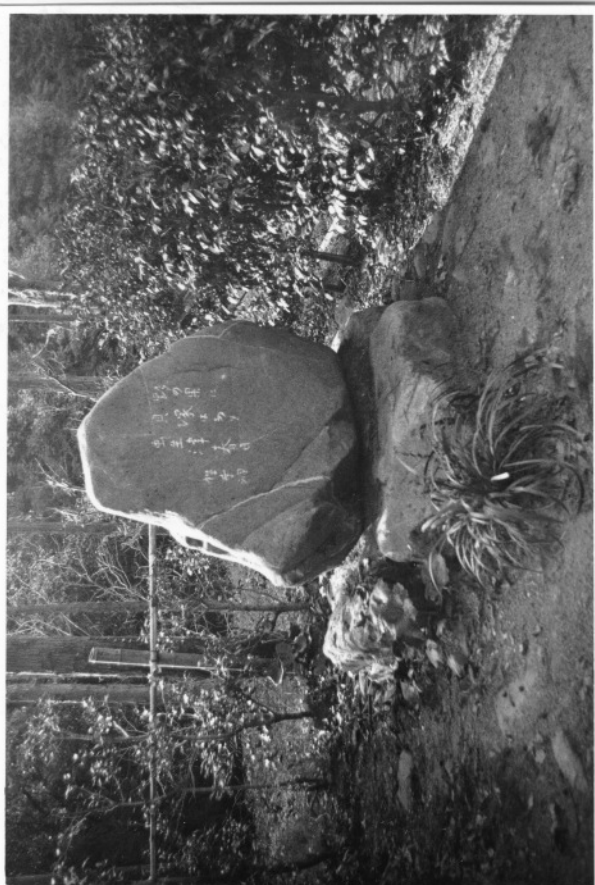
禪寺洞

碑陰

文字なし

略歴

吉岡禪寺洞 本名 善次郎 明治三十二年七月二日 福岡県粕屋郡箱崎町北海門戸に生まれる 昭和三十六年三月十七日歿す 享年七十二歳 法名 大空院銀漢亭禪寺洞居士



吉岡禅寺洞句碑

所在地 福岡県遠賀郡遠賀町虫生津（むししょうづ） 高田神社境内

野の果に

貝塚はあり

虫生津 春日

禅寺洞

碑陰

一九六八・四

所在地 鹿児島県出水市荒崎 鶴の展望所

土古く渡米の鶴を歩かしむ

禅寺洞

碑陰

文字なし



吉川英治歌碑

所在地 千葉県佐倉市白井 鹿島川 飯野橋畔

萱 屋 は

母のむねにも

似たるかな

たかきを

わすれ

たゞ

ぬくもれり

吉川英治

碑陰

文字なし

(注) 昭和五年五月建立(説明板)



吉川英治歌碑

所在地 千葉県佐倉市臼井 鹿島川 飯野橋畔

萱 崖 は

母 の む ね に も

似 た る か な

た か き を

わ す れ

た ら

ぬ く も れ り

吉 川 英 治

碑陰

文字なし

(注) 昭和五十年五月建立 (説明板)

略歴

吉川英治 本名 英次 (ひでつぐ) 明治 25 年 8 月 11 日 神奈川県久良岐郡
中村根岸に生れる 太田高等小学校高等科中退 昭和 37 年 9 月 7 日歿す
享年 70 歳 法名 崇文院殿釋仁英大居士 墓は東京都府中市多磨町 多磨
霊園 20 区 1 種 51 側 5 番にある



吉川英治撰 萬年橋記今碑

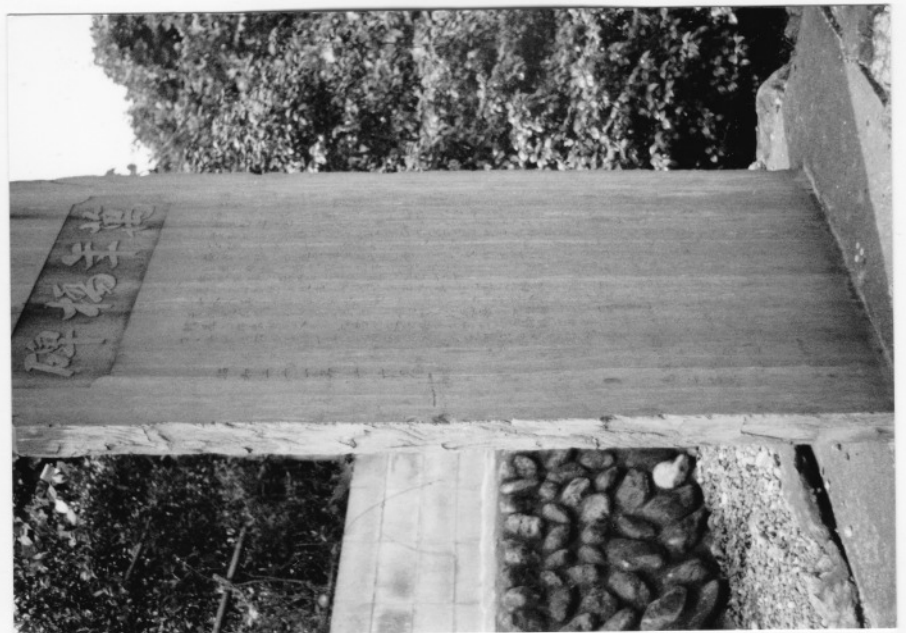
所在地 東京都青梅市畑中二番 万年橋袂

萬年橋記今碑
溪谷から田園へと多摩川の姿はこの萬年橋を境として全く趣を變へて行きます
地勢の示すやうに 由来この渡頭は河東河南の村々に跨り 吉野御獄五日市などの要衝に
當りながら久と昔の俣の姿で通路は大雨毎に洗ひ流る爲に對岸の村人はそのたびに糧も
失ひ交通も絶たれた、自然的な宿命の下に暗澹たる年月を過して来たのでしたその頃に
吉野村畑中の鈴木義長机久壽土方大石衛門村上民和土方重太郎等の諸氏が一心發起架橋
を誓つて 財を投じ 官を説き 村人を諭しました 人々もよく和協して 各戸零細を積み
年 勞力を捧げて 遂に明治三十二年五月 始めて木橋萬年橋を架し 越えて明治四十年 鉄橋と
し 茲に積年の 難問題を眞事に解決しました またこの事は 實に多摩溪谷に鉄橋架設の
實現を見た最初のものであつたのです
橋 見たまへ 自然の文化との調和を また 半世紀前の 村人たちの 逞ましい 文化精神を
山水の美しさは 正に日本の天興です 然し 郷土老人たちの 愛郷心も 公德心も 克己心も
その美に劣るものではありません 茲に 遺徳を仰がつとして 一碑を建てたわけであり 幸
朝暮に往来する人々も 觀光の遊子も 歩をふと 橋畔に止められて この一石に 心奪れら
る、時々は 郷土には 一草一花の 薫もあることを 相共に 大きな 歎とせられるであります
碑 昭和二十一年十二月

川合玉堂題
吉川英治撰
尾上柴舟書

碑陰

架橋發起者 贊助者
十九名(略) 百十二名(略)
昭和壬午正月 畑中橋徳公建之



吉川英治撰 萬年橋記念碑

所在地 東京都青梅市畑中 1 丁目 万年橋袂

碑 橋 年 萬 (横書き)

(この下に縦書きで次の文章が書かれている)

溪谷から田園へと多摩川の姿はこの万年橋を境として全く趣を變へて行きます／
地勢の示すやうに 由来この渡頭は河東河南の村々に跨り 吉野御嶽五日市などの要衝に／
當りながら久しく昔の俣の姿で通路は大雨毎に洗ひ流され為に對岸の村人はそのたびに糧
も／失ひ交通も絶たれたゞ自然的な宿命の下に暗澹たる年月を過して来たのでしたその頃
に／吉野村畑中の鈴木義長机久壽土方太右衛門村上民和土方重太郎等の諸氏が一心發起架
橋／を誓って財を投じ官を説き村人を諭しました 人々もよく和協して各戸零細を積み／
勞力を捧げて遂に明治三十五年五月始めて木橋萬年橋を架し越えて明治四十年鉄橋と／し
茲に積年の難問題を見事に解決しました またこの事は實に多摩溪谷に鉄橋架設の／實現
を見た最初のものでもあったのです／

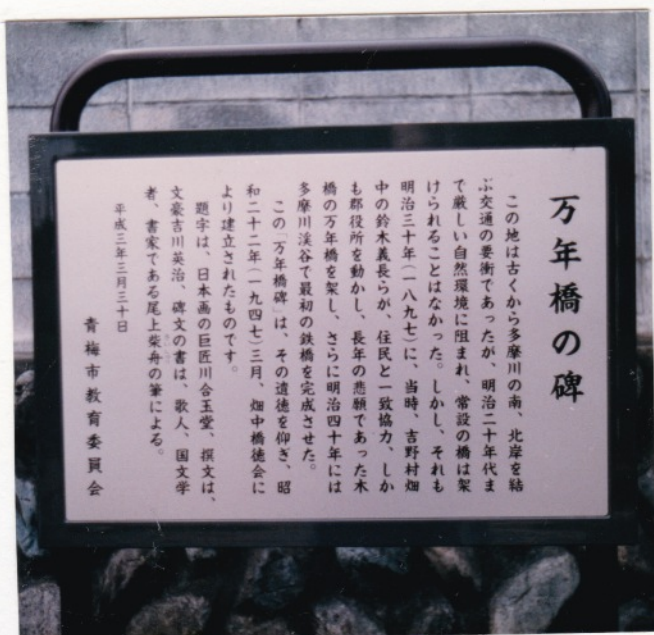
見たまへ 自然の文化との調和を また半世紀前の村人たちの逞ましい文化精神を／山水
の美しさは正に日本の天與です 然し郷土老人たちの愛郷心も公德心も剋己心も／その美
に劣るものではありませんぬこゝに遺徳を仰がうとして一碑を建てたわけであります／朝暮
に往来する人々も観光の遊子たちも歩をふと橋畔に止められてこの一石に心琴を触れら／
るゝ時なほ郷土には一草一花の薫もあることを相共に大きな歓とせられるであります／

昭和二十一年十二月

川 合 玉 堂 題

吉 川 英 治 撰

尾 上 柴 舟 書



碑陰

架橋発起者

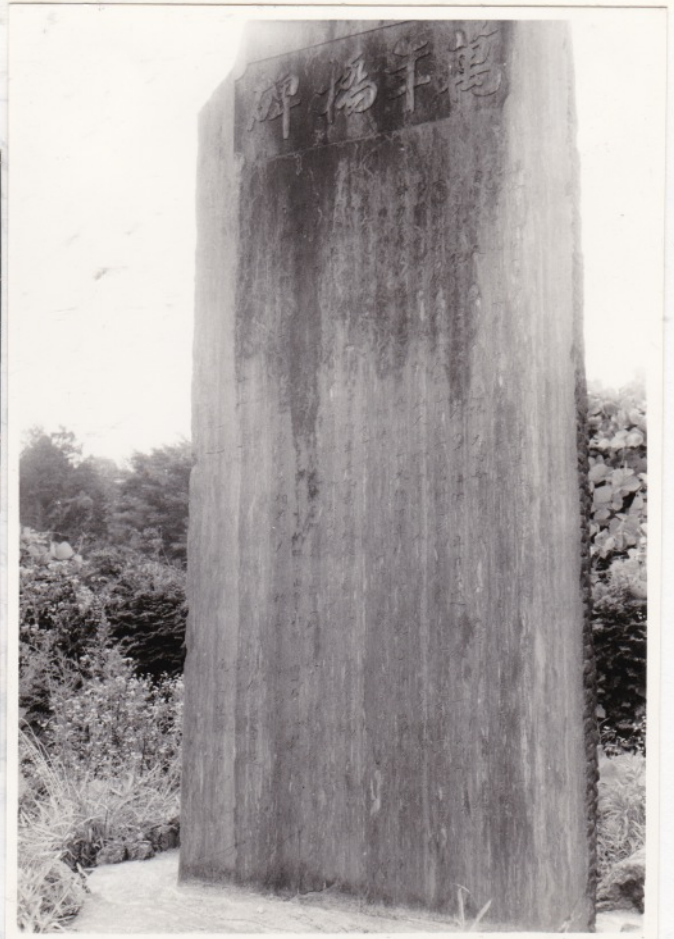
賛助者

十九名 (略)

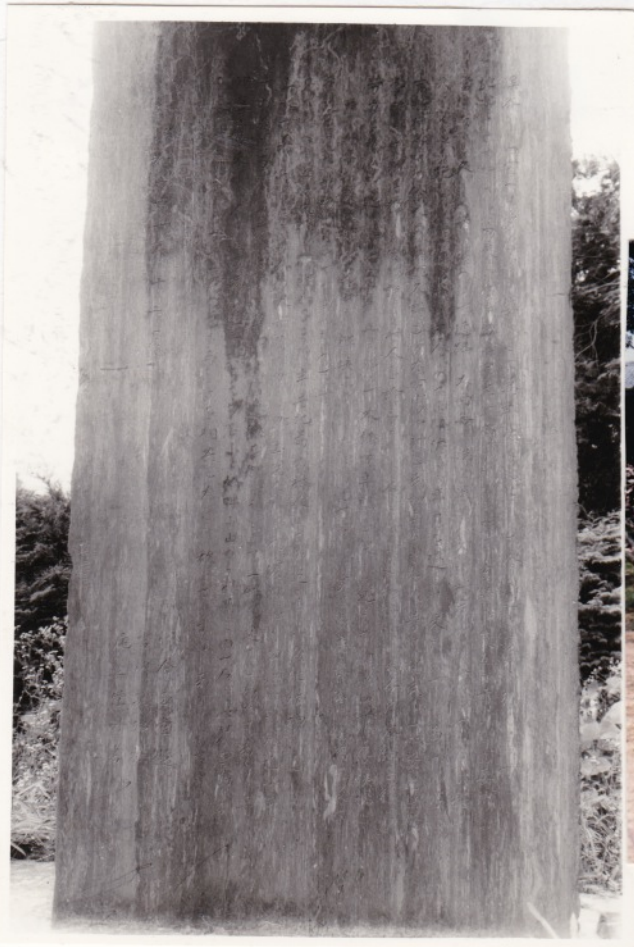
百十二名 (略)

昭和二十二年五月 畑中橋徳会建之

寺川東
 記念館
 の
 庭
 ↓



万平橋碑
 ←



記念館の
 庭
 ↓

万年橋碑 (4枚共)





吉川英治記念館入口の道 ←



記念館ホールの扁額 ←



吉川英治旧宅主屋 ←

吉川英治句碑

所在地 東京都青梅市柚木二丁目 〔吉川英治記念館〕庭内

濁世にや

らん汗ばみの

盧遮那佛

英治

吉川先生新平家物語執筆当時
取材のため大佛殿を訪れ寺僧
の説明に 梅雨時は結露する
を依てる句あり 杉本健吉記

裏面

見え不明

(注)材質は屋根瓦



吉川英治句碑

所在地 東京都青梅市柚木 1-101 「吉川英治記念館」庭内

濁世にや

おん汗ばみの

盧遮那佛

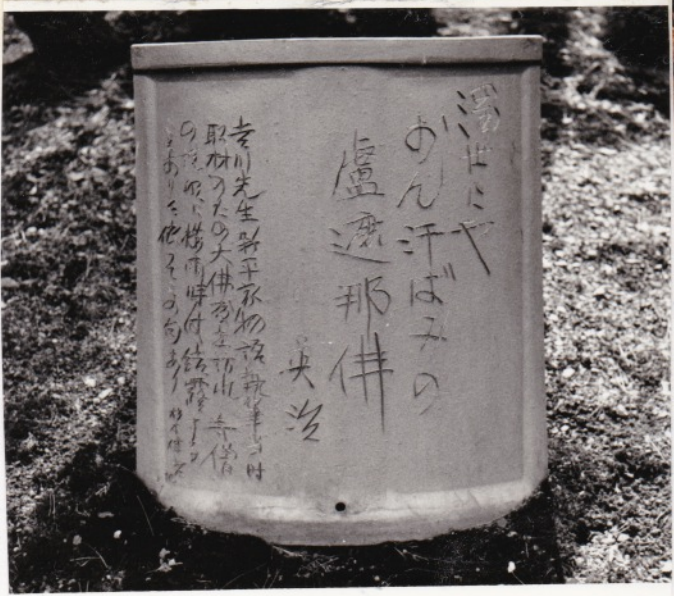
英治

吉川先生新平家物語執筆当時
取材のため大佛殿を訪れ寺僧
の説明に 梅雨時は 結露する
ことありと依ってこの句あり 杉本健吉記

碑陰

見えず不明

(注) 材質は屋根瓦



↑
書斎

↑ 女屋
↓

↑
樹令 600年
椎の木

↑ 記念館
↓ 書斎



吉川英治詞碑

所在地 新潟県佐渡郡羽茂町本郷四〇 羽茂高校玄関前

我以外

此目

我師

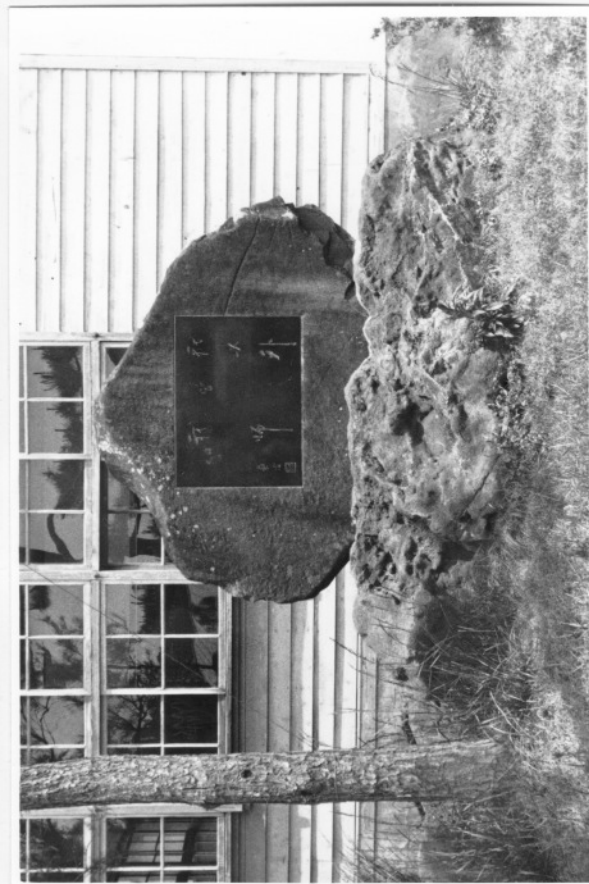
英治

碑陰

文字なし

略歴

吉川英治 本名 英次(ひでつぐ) 明治三十五年八月十一日 神奈川県久良岐郡中村根岸に生まれる 大田高等小学校高等科中退 昭和三十七年九月七日歿す 享年七十一歳 法名 崇文院殿釋仁英大居士 墓は東京都府中市多磨町 多磨霊園三十区 種五(側五番)にある



吉川英治詞碑

所在地 新潟県佐渡市羽茂町本郷 410 羽茂高校 玄関前

我 以 外

皆

我 師

英 治

碑陰

文字なし

吉川英治紀念館



吉川英治撰 竹内栖鳳追慕碑

所在地 静岡県熱海市泉 保養院境内

(つめ塚)

つめ塚

裏面

昭和十九年八月

貞榮しるす

(筆塚)

筆

裏面 文字なし

(副碑 一)

栖鳳辞世の地

裏面

昭和十九年八月三日

みまかる

六人部貞榮

(副碑 二)

湯河原の地 由来春秋の塵腸を洗ひ 幾多時人の昨夢をつむ 栖鳳翁また
清隠ここに久しく 晩年大成の畫業 殆その湯泉第一樓の畫房に成る 畫樓
の前裁に山も、の一樹有り 別に山桃庵の號ある所以といふまた至裡一侍者あり
蘇氏に於る朝雲の如き乎 日暮厨掃の餘暇 硯を洗ひ彩泥を浴ぎ 葉餌起居の
扶けなど 老来総て此至情の手に俟ざるなし
藝術の人 咲容外は閑雅なるも 内は苦吟慘心精進常に孤寂たり 生涯荊棘の
あゆみに似 傷魂屢々俗にやぶれ 軋悔も道なく研心日夜亦他事あるなし 翁の
燃ゆせしところ又其半生の足蹟に觀るも 歴々是を推知するに難からず 晩歳殊に
燃ゆる有り 一道の究達へと 更に猶思ふ 寸命は限りあるを 一心の彩管何を以

畫境の妙は茲に渾然 古今の群峯を 超ゆれど
の爪も常に長きを忘るにいたる 翁時々侍者を
おもふ是みな巨匠の燃心の餘葉 塵にして塵に
かせむやと 即ち折々剪るところの爪を獨りひひ
霜のかたみを積む 翁生前其を知て枕頭に遺託
花鳥草魚 みな是 吾師也 吾友なれ 謝恩と
げなきところは筆塚を建て 併せて復 傍らに

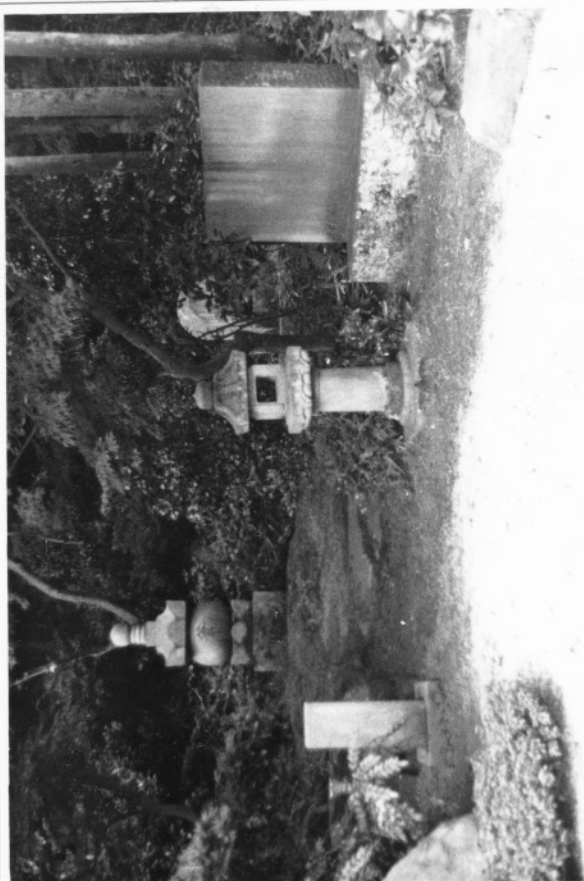
の事 皆 一春一秋の 紛々に屬す 知らず泉
に 溪間の 淙々昨を問はず 戦下の歳月は歳月を
に従てすがたを變ぜむ 不朽なるはそれ唯翁が
品のみ 故人安じて可ならむ 百世の下必ず生
敢而又曰ふ 後世 その偉を 我が繪畫史上に
仰ぐ人の 稀に 此處に到て 若し 巨匠の
ば 人間みな有す 爪皮の情如 斯く 超大作と
の 花に對し是も亦 故人え かく 無色
一滴の 貴眼をこれに垂れたまへ
生前 一會の縁を以て

英治生誌

碑陰 遺命建之

協助 六人部貞榮
伏原羊次郎

工匠 四名列記(略)



吉川英治撰 竹内栖鳳追慕碑

所在地 静岡県熱海市泉 保養院境内畫

(つめ塚)

つめ塚

裏面 昭和十九年八月

貞榮しるす

(筆塚)

筆

裏面 文字なし

(副碑)

栖鳳辞世の地

裏面 昭和十七年八月二十三日

みまかる

六人部貞榮

(説明碑)

湯河原の地 由来春秋の塵腸を洗ひ 幾多時人の昨夢をつゝむ 栖鳳翁また
静隠 こゝに久しく 晩年大成の畫業 殆その湯泉第一樓の畫房に成る 畫樓
の前栽に山もゝの一樹有り別に山桃庵の號ある所以といふまた室裡一侍者あり
蘇氏に於る朝雲の如き乎 旦暮厨掃の餘暇 硯を洗ひ彩泥を溶き 藥餌起居の
扶けなど 老来総て此至情の手に俟ざるなし

藝術の人 咲容外は閑雅なるも内は苦吟慘心精進常に孤寂たり 生涯荊棘の
あゆみに似 傷魂屢々俗にやぶれ 韜晦も道なく研心日夜亦他事あるなし 翁の
期せしところ又其半生の足蹟に觀るも 歴々是を推知するに難からず 晩歳殊に
燃ゆる有り一道の究達へと 更に猶思ふ 寸命は限りあるを 一心の彩管何を以
て 悠久の國土に報ぜむかを

七十九歳 老て更に倦まず 畫境の妙は茲に渾然 古今の群峯を 超ゆれど
瘦軀は鶴に似 冬日病多く指頭の爪も常に長きを忘るにいたる 翁時々侍者を
して其爪を剪らしむに 侍者のおもふ是みな巨匠の燃心の餘葉 塵にして塵に
あらず 何とてむげに拂箒にまかせむやと 即ち折々剪るところの爪を獨りひ
そかに匣底に蓄へ いつか長星霜のかたみを積む 翁生前其を知て枕頭に遺託
するあり 思ふに 此地の山川花鳥草魚 みな是 吾師也 吾友なれ 謝恩と
惜情の意を一石に寄て 世路邪げなきところに筆塚を建て 併せて復 傍らに
我が枯爪を埋むべしと



翁すでになし 過去総て人事の事 皆 一春一秋の 紛々に屬す 知らず泉
下の青爪獨り今日何を想ふかを 溪間の淙々昨を問はず 戦下の歳月は歳月を
超えて迅し 碑前の訪人また時に従てすがたを變ぜむ 不朽なるはそれ唯翁が
心血を以て 國土に托せる幾神品のみ 故人安じて可ならむ 百世の下必ず生
前に勝るの 知己に會はれむ 敢而又曰ふ 後世 その偉を 我が絵畫史上に
見 なほ その遺作に 高風を仰ぐ人の 稀に 此處に到て 若し 巨匠 の
半面に ふと 心のふるゝあらば 人間みな有す爪皮の情 如斯 超大作と
如斯 煩小爪と 二相一土の苔花に對し是も亦 故人ゑがく 無色
寂光の一幅として あはれ零露一滴の貴暎をこれに垂れたまへ

生前一會の縁を以て

英 治 生 誌

碑陰

遺命建之

六人部貞榮

協助 伏原羊次郎

小川 敏夫

工匠 四名列記(略)